

# 看護学生のはじめての臨地実習に対する思い

## — フォーカスグループインタビューによる分析 —

前川 利枝<sup>1</sup>，大石ふみ子<sup>2</sup>，櫻井しのぶ<sup>2</sup>

キーワード：看護学生，臨地実習，実習指導

### I. はじめに

臨地実習は，講義で学んだ知識・技術を統合し，専門職業人としての責任や役割を認識する場であると同時に，看護技術の習得のみならず患者に対する看護の心を養うための貴重な学習の場ともなる。しかし学生にとって実習は，慣れない環境の場で多くのストレスを体験することであり，特に初めての实習における学生の緊張は非常に強い。

実習時にかかえているさまざまな思いを指導者に受け入れられなかったり、拒否されたりすると、学生は実習に対しての意欲が低下してしまい、効果的な実習ができなくなる。田村ら<sup>1)</sup>が「学生は臨地実習指導者からの否定的なケアリングにより、実習に取り組む意欲が低下したり、態度が萎縮し、肯定的認知ができなくなっていると考えられる」と述べているとおり、指導者の関わりは実習に対する意欲や姿勢に大きく影響するため、指導者の学生への適切な関わりは重要であり、適切な関わりのためには指導者が学生を十分理解することが必須であるといえる。

過去、看護学生の実習不安に関わる研究は多く報告されている。しかし、学生の実習に対する思いは不安だけではなく複雑に絡み合っており、その全体を知ることこそが、効果的な実習指導には重要である。

本研究の目的は、初回実習に挑む学生の抱く思いの全体像を明らかにし、実習指導方法のあり方について検討することである。

### II. 用語の定義

本研究における「思い」とは、心の働きとその内容、また心の状態、とする。

### III. 研究方法

#### 1. 対象

3年過程の看護専門学校1学年で、入学して初めての実習である基礎看護学実習を一週間以内に実施する予定の者で、研究参加への同意が得られた者

#### 2. 調査の場

学生がなじんでおり、居心地良く感じる場所

#### 3. 調査内容

初めての実習を前にしての思い

#### 4. 調査方法

##### 1) フォーカスグループインタビュー

S. ヴォーン他著「グループ・インタビューの技法」<sup>2)</sup>の手引きに従い以下の手順で行う

##### (1) インタビュー目的の説明を行う

「このインタビューはテストではありませんし、質問に対しても正しい答え、間違った答えといったものは決してありません。どちらかといえば臨床でこれから看護師を目指そうとしている皆さんの本音をお聞かせいただくことが目的で、私たちの勉強のために行わせていただくものです。皆さんが何をお考えになってどうお感じになったかが、私たちにとって興味があるところです。私たちはこのインタビューを通じて皆さんのご意見を知りたいと思っています」

##### (2) インタビュー時の約束事の説明を行う

- ① 必ず答えなければならないことは無いということ。話したいことがあったときに発言すればよい。
- ② 他の人が話している時は聞いてもらうこと。感情的になることがあるかも知れないが話に割って

1 済生会松阪総合病院

2 三重大学医学部看護学科

入らないこと。

- ③ 一人ひとりの意見をのべてもらうのが大事であることを覚えておいて欲しいということ。
- ④ グループのほかの人が言ったことに同意する必要はないこと。また一方で、否定的な主張やほかの人をだまらせるようなことをしないで、自身の意見を話して欲しいということ。

以上①から④の説明後、「初めての実習を前にどんな気持ちですか？」と切り出し、フリートーキングを開始する。インタビュー内容は録音し後日逐語録として書きおこすものとする。

### (3) インタビューにおける主催者の役割

主催者は3名(司会者、記録者、司会者の補助)とする。各人の役割は以下のとおりである。

- ① 司会者：会話がスムーズに行えるよう話題を提供したり、もう少し詳しく聞きたいことを尋ねる。
- ② 記録者：学生の表情、態度を記録する。
- ③ 司会者の補助：対象に適宜声をかけリラックスした環境を整える。また、録音などインタビューがスムーズに行えるように手配する。

## 5. 分析方法

逐語録より、学生の実習に対する望み、心配、考え、予想など学生が語る気持ちすべてを抽出してコード化し、意味の類似したコードを集め概念化し、概念を整理してサブカテゴリーとし、更にサブカテゴリー間の関係性により分類しカテゴリーを形成する。尚、信頼性と妥当性を高めるために、分析プロセスに於いては学生の発言した内容や意図が損なわれていないか研究者間で確認する。

## 6. 倫理的配慮

参加依頼にあたっては、対象者の所属する看護学校教員から、研究の目的・方法および所要時間について説明し、研究者からの説明を聞いてくれるかどうかの意思を確認する。その後、研究者が参加拒否の権利、また断っても学生に不利益が生じないこと、プライバシーの保護、提供されたデータは匿名性を守り研究目的以外には使用しないこと、録音テープは研究終了後処分すること、発言が実習指導や実習の成績に影響しないことを説明し、了解が得られた後、インタビューの時間と場所を調整する。

# IV. 結 果

## 1. 対象者の概要

対象者は全て女子学生で、人数は5名であった。全

対象者から録音の許可が得られた。インタビュー時間は準備や会話が開始するまでの時間、終了後の挨拶を除き約60分であった。

## 2. 学生の抱く思いの分類

分析の結果、学生の抱く思いとして16の「概念」から8つの〈サブカテゴリー〉が得られ、これらは【不安】と【期待】2つの【カテゴリー】に分類された。サブカテゴリーとカテゴリーについて以下に述べる。

### 1) 【不安】

カテゴリー【不安】は、〈どんな看護師なのかが不安〉、〈患者とうまく付き合えるか不安〉、〈自分がうまくできるか不安〉、〈実習のノルマが達成できるか不安〉の4つのサブカテゴリーから構成された。

#### (1) どんな看護師なのかが不安

〈どんな看護師なのかが不安〉は、[厳しくされることが怖い]、[大事にして欲しい]、[理想的な看護師であって欲しい]より構成された。

① [厳しくされることが怖い] は、厳しそうなイメージのある看護師に失敗や間違いをしかられ、落ち込まされてしまうのではないかという学生の看護師に対する不安である。

発言例：「看護師さんが怖そう」、「『なんでそんなことまちがえるの』とか言われたら嫌」、「『技術ができていない』といわれたらショック」、「イメージが厳しい」、「仕事ができないといけないというイメージがある」、「失敗に何の遠慮もなくズバズバ言ってくる感じがする」、「『私ら忙しいのに何で学生受け入れやなあかんの』という態度とられること」

② [大事にして欲しい] は、嫌がらず、細かく、優しく、傍にいて、寄り添っていて欲しいという学生の看護師への指導方法に対する希望である。

発言例：「わからなかったり、戸惑ったりしたときに教えてもらえると安心」、「聞きたいことがあるときにちょうど傍にいて欲しい」、「優しく教えて欲しい」、「教えて欲しいことを適当に言われたりしたら邪魔なのかと思って聞きたくなくなる」、「教えてもらったらすごく嬉しい」、「ひとつずつ細かく教えてくれる看護師さんやったらすごく嬉しい」、「わからないことはちゃんと聞こうと思うからちゃんとそれを返して欲しい。面倒くさがらないで教えて欲しい」、「1日の最後とかに『質問は無いですか』と聞いてくれる時間を作ってくれたりしたら、受け入れられているんだと感じることができる」

③ [理想的な看護師であって欲しい] は、夢を壊さないで欲しい、失望や幻滅させないで欲しいという学

生の看護師に対する願いである。

発言例：「面会に行ったとき若い看護師はピアスとかしていた」、「私たちは看護師から患者に対して名前では呼ばなくてはいけないと言われているのに、看護師が『おじいちゃん』と呼んでいるのを聞いたし、茶髪の看護師も沢山いた」、「学生には厳しく言うのに自分たちには甘いのではないだろうか」、「今思っている看護師像とギャップがありそう」、「実際にイメージしている看護師と違ったらすごいショック」

## (2) 患者とうまく付き合えるか不安

〈患者とうまく付き合えるか不安〉は、[コミュニケーションが不安]、[学生としての私を嫌がらず無条件に受け入れて欲しい]、[条件のいい患者であって欲しい]より構成された。

① [コミュニケーションが不安] は、患者と十分な会話をしたり関わりをしたいという思いから生じた。

発言例：「沈黙したまま実習が終わっていったら悲しい」、「患者が元気すぎると何もケアすることが無くて喋り辛い」

② [学生としての私を嫌がらず無条件に受け入れて欲しい] は、すぐに怒ったり文句を言わずに自分を受け入れて欲しいという要望である。

発言例：「ちょっと間違えたら怒ってくるような患者だったら嫌」、「嫌がられたら嫌」、「要望とか言ってもらえなかったら嫌」、「文句言われても嫌」、「まだ看護学生だからこんな人に任せていいのか思われたら嫌、口に出して言われなくても内心思われているかもしれない」

③ [条件のいい患者であって欲しい] は、異性や世代の差などで自分にとって異質であったり、重症すぎたり軽症すぎて実習しにくい条件である患者に接することへの不安である。

発言例：「気難しい、頑固で性格悪くてケアをはねつけたりするような高齢の患者だったらどうしよう」、「高齢者ばかりという感じがする。高齢者は文化も違うし考え方もぜんぜん違う、生きた長さも違うから自分の視点だけで物事捉えるからぜんぜん伝わらない」、「痴呆（認知症）のある年寄りだったらどう接していいかわからない」、「いい体験ができるかどうかは自分の気持ちも大事だけどどんな患者にあたるかにもよる」、「練習では清拭とかも女性が対象だったから男性が対象になると変わってくる」、「お年寄りだったら拭き方も注意することがでてる」、「重症患者でも何したらいいかわからない」、「先輩から患者が若すぎて大変だったと聞いた」

## (3) 自分がうまくできるか不安

〈自分がうまくできるか不安〉は、[失敗したらど

うしよう]、[足手まといで看護師に手間をかける自分]、より構成された。

① [失敗したらどうしよう] は、失敗することで実習が成功しないのではないか、という不安である。

発言例：「怪我させたらどうしよう」、「焦って患者の気持ちまで考えられない無神経な学生になってしまいそうで不安」、「技術で失敗するよりコミュニケーションがちゃんととれるだろうか」、「友人が足浴の湯を病室でぶっちゃけてしまったといっていた」

② [足手まといで看護師に手間をかける自分] は、臨床での実習生としての存在になることへの不安である。

発言例：「せかされたりすると邪魔かなと感じる」、「看護師の足手まといになるようなことしたらあかん」、「貴重な時間を割いてくれて申し訳ないと思う気持ちもある」

## (4) 実習のノルマ達成が不安

〈実習のノルマ達成が不安〉は、[体がもつか心配]、[記録が多い]より構成された。

① [体がもつか心配] は、時間や体調に関するセルフコントロールに対する不安である。

発言例：「休まないようにしなくてはならない」、「風邪ひかないようにしなくてはならない」、「朝早い」、「寝る時間が無い」

② [記録が多い] は、[体が持つか心配] と関連し、課題の量を心配する気持ちである。

発言例：「たくさんの記録がストレス」

## 2) 【期待】

カテゴリー【期待】は、〈患者との関わり〉、〈看護の喜びへの期待〉、〈リアルな環境で学ぶことへの期待〉、〈私の学びの向上への期待〉より構成された。

### (1) 患者との関わり

〈患者との関わり〉は、[現場で患者と接する楽しみ]、[学生ならではの濃密なコミュニケーション]より構成された。

① [現場で患者と接する楽しみ] は、臨床で初めて患者と接するという憧れの仕事を体験することに対する期待である。

発言例：「患者と触れ合えることがすごく楽しみ」、「看護師という意識で触れ合える」

② [学生ならではの濃密なコミュニケーション] は、看護師よりも一人の患者に関わるのが長いことから、きっと十分にコミュニケーションがとれ、うまくいくはずという意気込みである。

発言例：「看護師は忙しいイメージがあるけれど、私たちならもっと患者さんとコミュニケーションがとれる」、「今回の実習では技術よりもコミュニケーション

ンがとれることが大事」,「同じ人に一日ずっと関わってられる」,「毎日患者とコミュニケーションがとれるいい仕事」

## (2) 看護の喜びへの期待

〈看護の喜びへの期待〉は,「患者に喜んでもらうこと」であった。

①「患者に喜んでもらうこと」は,自分の関わりによって,患者から得られる反応への期待である。

発言例:「話をしてすごく嬉しそうな顔をしてくれたりすると嬉しい」,「患者とのコミュニケーションを大事にすると自分も楽しいし,患者も楽しい」

## (3) リアルな環境で学ぶことへの期待

〈リアルな環境で学ぶことへの期待〉は,「生きた体験をすること」であった。

①「生きた体験をすること」は,教科書では学ぶことができない,臨床での実体験を通して学ぶことに対する期待である。

発言例:「経管栄養とか教科書では習ったけど実際に見るのも大事」,「解剖生理だけではなく実際の人間を見ていくこと」,「病院で働くということ」,「看護師の大変な所とかリアルな感じを見たい」

## (4) 私の学び向上への期待

〈私の学び向上への期待〉は,「学習効果向上への期待」,「学習意欲向上への期待」から構成された。

①「学習効果向上への期待」は,実習することで授業や教科書に書かれていることの要点がわかり効果的に学べるという期待である。

発言例:「勉強だけではぜんぜんだめ」,「実習をしたたら勉強しなくてはならないポイントが分かる」

②「学習意欲向上への期待」は,実習での緊張感が学習意欲の向上につながるであろうという自分自身に対する期待である。

発言例:「沢山勉強することはあるけど全部必要なのか実習で確かめたい」,「気分を高めてやっていくのがいい」

# IV. 考 察

## 1. 学生が実習に不安を抱く理由

### 1) 傷つきたくないという思い

学生は実習に対し,「厳しくされることが怖い」という思いを抱いている。これは,少子化,核家族化の中で育った現代の若い世代の学生は,親や教師から厳しく叱られた経験が少なく,厳しくされることに耐えられないと感じ,厳しい教え方に非常にマイナスのイメージを抱いていることが一因であると考えられる。同様に「大事にして欲しい」からも,厳しい教え方を

恐れ,優しくして欲しい,ある意味では甘やかして欲しいという願いが伺える。これらからは,指導者や実習場での看護師に対して,学生である私を受け入れて欲しい,受け入れられなかったら私は傷ついてしまうのだ,という強いメッセージが感じられる。

患者との付き合いでの「コミュニケーションが不安」という思いは,人生経験,つまり人間関係の経験が乏しい学生にとって,他者しかも世代も性別も違うなど異質な存在である患者とのコミュニケーションは大きな課題であり,困難を予期していることを示している。「学生としての私を嫌がらず無条件に受け入れて欲しい」という思いも,患者の方から私を受け入れて欲しい,受け入れられなかったら悲しく,傷ついてしまうという思いがうかがえる。

このように学生は看護師や患者という未知の人間との関係において,厳しくされたり拒絶にあったりすることを想像し,そうなったときに自分が傷つくことを予期し,傷つきたくないという思いを抱いて不安になっているといえる。

### 2) 他力本願な考えから生じている不安

学生は,看護師に自分を大事にして欲しいと感じている。また患者に対しては「条件のいい患者であって欲しい」と思っている。つまり実習がうまくいったり,実習で辛い体験をしないために,自分を取り巻く環境が優しく条件の良いものであって欲しいと考えているのである。このように,他力本願に周囲の条件に注文をつけるのは,自分がよりよく学ぶことこそを大切に思う,ややもすると自己中心的とも受け取れる考えに根ざしていると考えられる。そして,自己中心的でかつ他力本願な考えに根ざした不安である限り,その不安は自分の事前準備の努力で解消できないため,このような不安は無力感につながる可能性を持っており,実習に向かう前向きな姿勢を疎外しかねない大きな問題だと考えられる。

### 3) 理想と現実のギャップへの不安

学生は,自分が目指している看護という仕事について,専門知識を持って常に優しく患者に接するすてきな職業だと考え,知的で優しい看護師という理想像を描いている。そのため,自分が接する看護師に対しては,内面はもちろん外面も,学生が持っている看護師のイメージ通りすばらしい人であって欲しいと思っている。しかし現実の看護師は学生のイメージとは異なっているだろうとも考えているため,学生は実習の場で看護師の働く姿に接し,美しい理想が壊されてしまうことに不安を感じていると考えられる。

### 4) 失敗への恐れ

〈自分がうまくできるか不安〉という思いの中には,



「失敗したらどうしよう」という思いがある。失敗について中西<sup>3)</sup>は「学生たちはもちろん自分の能力の不確かさを誰よりも痛感している。しかし彼女らは患者の前ではともかくいっばしの援助者として振舞わなければならない。なぜかといえば、看護する以上患者との信頼関係が大切で、失敗したりあやふやな態度でのぞんだりしては信頼関係を築くことはできないと教えこまれているからである」と述べている。つまり、学生にとっての失敗は、患者との信頼関係を失いかねない重要なことである。従って、失敗することを考えることは、実習での緊張感、不安を増強させる要因となる。20歳前後の若者はプライドが高く人前での失敗を非常に恥ずかしいと感じるものが多い。感受性が強く、プライドが高い学生に取って、実習における失敗は自分自身のイメージを傷つけるため、いっそう脅威であるのだと考えられる。

## 2. 学生の実習への期待

### 1) 患者との関係

患者とのかかわりは、未知の人との触れ合いや、コミュニケーションに対する好奇心や希望という点で、学生に期待をもたらしたと考えられる。学生は、患者とのコミュニケーションに不安を感じている反面、それに期待、楽しみを抱いており、学生の不安と期待は表裏一体に存在している事が示された。実習生である自分は、忙しい看護師より「学生ならではの濃密なコミュニケーション」ができるのでは、と述べているように、学生は自分が未熟であっても、存在意義を示したい、それは人間的な関わりにおいてこそであると考えている。実習における学生の「受け入れられたい」、「認められたい」という思いはこの思いの根底にも存在していると考えられる。

### 2) 看護の本質に触れることに対する期待

学生は、「(患者に)喜んでもらえたら私も嬉しい」と語っているが、これはまさに看護の喜びであり、純粋な学生が抱くこのような思いは何より大切にされるべきである。臨床経験が長い看護師は、時に事務的に仕事をこなすことに流れ、看護の喜びへの感性が鈍ってしまっていることも起こりうる。学生のこのような看護の喜びへの期待が病棟で達成されることは、病棟看護チームにとっても大きな刺激となり、有意義であると考えられる。

### 3) 私を成長させてくれる実習への期待

〈私の学び向上への期待〉からは、緊張して不安も多くある実習は、教室で座って受ける授業よりはストレスも多く辛い思いもするであろうけれど、その困難から得るものも大きいという学生の積極的な姿勢が伺

える。多くの不安を抱き、時に消極的に見える学生も、心の中には困難を乗り越え成長したいという思いを抱いている。このような思いは、困難を乗り越えようという前向きな気持ちの表れであり、注目されるべきだといえる。

## 3. 指導のあり方

実習に対する不安においても、期待においても、学生は実習で関わる人達に受け入れられたい、認められたいと強く思っている。これに対して、指導者は学生を大事に思い、指導者自身も学生と共に学ぼうと思っているということを言葉や態度で表すことが必要であると考えられる。

実習に対する【期待】は学生の“頑張りたい”“学びたい”という学習に対する意欲である。下山<sup>4)</sup>は学習意欲について「特性的意欲を中心に考えれば『成功動機』『有能感』『自己責任性』『学習価値観』というプラスの要素と「失敗回避動機」というマイナスの要素がある。したがって学習意欲を育てるという観点からすれば、いかにしてプラス要素を強め、マイナス要素を弱めるかということが問題とされる」と述べ、学習意欲の向上のために強めるべきプラス要素をあげている。実習に於いて、これらのプラス要素を強めるのは、なにより成功体験とそこでの指導者の関わりではないだろうか。実習で学生が得た小さな成功体験をも見逃さずに評価して学生を褒め、頑張ったことに対して「良く頑張ったね」と労いの言葉をかけることを大切にすることが何より重要である。

学生が【不安】を抱いている失敗体験に対しては、失敗したときになぜ失敗したのか、次に失敗しない為にはどうしたらよいのか、結果だけでなく過程を振り返るようにする必要がある。失敗に過度に傷つきその後に積極性が失われないように一方的に叱るのではなく、マイナス体験をプラスにする為に、指導者が学生と体験を共有し、一緒に考える姿勢を持つことが大切である。

「成功体験」においても「失敗体験」においても、学生の経験を振り返ることによって意味付けすることが実習指導者の重要な関わりである。実習での経験を学生の血肉とするために、先入観をなくして学生を見つめ、学生の表情や行動を見てその思いを推し量りタイミングを逃さない関わりが持てるよう努めていきたい。

## V. 結 論

1. 学生が初めての臨地実習を前に抱く思いには「不安」と「期待」があり、これらは失敗や傷つくこと

への恐れと学生としての自負、受け入れられないかも知れないというおびえと触れ合いへの期待というように複雑に絡み合っている。

2. 学生の「不安」と「期待」の対象は看護師、患者、自分自身、リアルな環境など様々である。
3. 実習指導者は学生の思いを理解し、成功したときも失敗したときも振り返ることによって意味付けしていくことが重要である。

## VI. おわりに

本研究で得られた結果は、実習を前にした学生が高い緊張状態にあり、多くの不安を抱えていること示している。学生が心に秘めた不安を和らげ、期待や意気込みを育てていくため、実習指導者はありのままの学生を見つめ、受け入れる姿勢を持つことが大切であると考える。

本研究におけるフォーカスグループインタビューで

の司会者らが実習病院での指導者であったことで、対象者の発言が影響を受けた可能性がある。また今回の研究では、対象者が5名と少ない為、今後さらに対象者を広げ検討したいと考える。

## 文 献

- 1) 田村美子, 白木智子, 進藤美樹: 看護学生が臨床指導者から受ける否定的ケアリング体験, 看護教育 45 (9), 748-752, 2004
- 2) S. ヴォーン, 他著: グループ・インタビューの技法, 慶應義塾大学出版会, 1999
- 3) 中西睦子: 臨床教育論: 体験からことばへ, ゆみる出版, 1996
- 4) 下山 剛: 学習意欲の見方・導き方, 教育出版, 1985
- 5) 藤岡完治: 学生とともに創る臨床実習指導ワークブック 第2版, 医学書院, 2001